

尾張と東濃の境界地域における 言語地理学的研究

太 田 有多子

曾 我 公 恵

ここに述べる「夕立と雷の方言分布」「めだかの方言分布」は、太田有多子・加藤順子・曾我公恵によって、1976年10月から翌77年8月にかけて行った尾張・東濃境界地域での臨地面接調査から得られた資料に基づいて考察したものである。

本題に入る前に筆者らが定めた被調査者に対する条件を述べておきたい。

原則として、次の条件を満たす人を選んだ。まず、1927年以前の生まれで、その土地で生まれ、その土地で育った人であること——少なくとも言語形成期にあたる3歳から15歳までをその土地で過ごし、それ以後の他の土地での生活経験（兵営生活を含む）も5年以内であることとした。

(1)

被調査者の性別に関しては余り考慮しなかった。というよりも最初の計画では男性であることとしていたが、養子縁組がかなりあったため、女性でもその土地で生まれ育った者であれば該当者に成り得るとしたのである。その結果、99名中女性28名を含んでいる。

調査が進むにつれて感じたことであるが、女性の方が日常生活により密接であるためか、昔その土地で使われていた呼び名などをよく記憶しており、回答を引き出しやすかったように思われる。

学歴、階層に関しては特に限定しなかったが、職種においてはなるべく「その土地柄を代表するような人」という考えから、瀬戸・多治

見・土岐各市及び土岐郡では製陶関係者を、春日井・名古屋・尾張旭各市では農業従事者を選ぶようにした。

さらに、言語感覚的に曖昧で質問の意味が理解できない人、又は精神・身体に欠陥のある人。つまり耳が遠い、或いは歯が抜けていて発音が不明瞭であるなどは調査に支障を生じるため被調査者として不適当とした。

これらの条件をもとに被調査者を選択したわけであるが、すべての諸条件をみたす該当者が見つからない

場合は、親も当人もその土地で生まれ育った者という条件のもとに、規定年齢を譲歩した所もある。その結果、平均年齢は男性72歳、女性73歳となった。

尚、今回の調査目的は明治後期から大正、昭和にかけての言語の歴史と伝播傾向を調べることにあったため、被調査者の幼年期から現在に至る使用語及び理解語に細心の注意を払い、調査を行った。

61の調査項目の中から、2点を選び、太田・曽我が考察したことを以下に述べる。

「夕立」と「雷」の方言分布

太 田 有 多 子

今回の調査項目61項目の中から「夕立」と「雷」を取り上げ、使用語形・理解語形の分布、被調査者の「夕立」「雷」に対する認識を考察してみた。

質問「夏の日に、今まで日が照っていたのに急に大粒の雨が降ってくることがあります。この雨のことを

何といいますか。」から得られた「夕立」の使用語形には、ユーダチ・ヨ－ダチ・ユ－ダツツァマ・ヨ－ダツツァマ・ヨ－ダツツァン・ユ－ダチアメ・ヨ－ダチアメ・ユ－ダチサメ・ヨ－ダチサメがある。(地図Ⅰ)

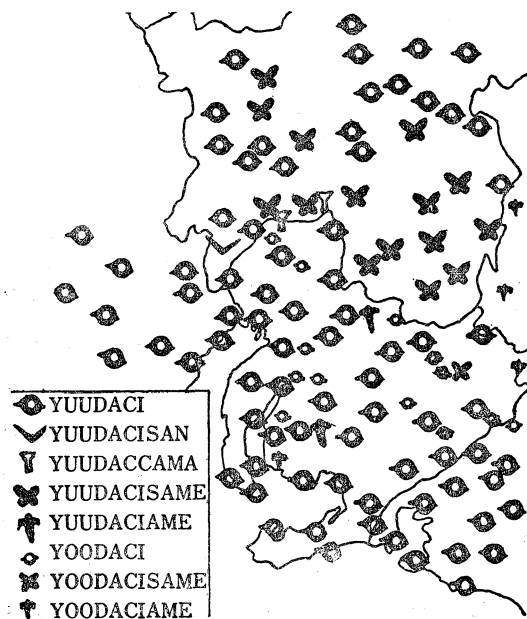
中でも、ユーダチに「雨」を付けた語形ユーダチアメ(ヨ－ダチアメ

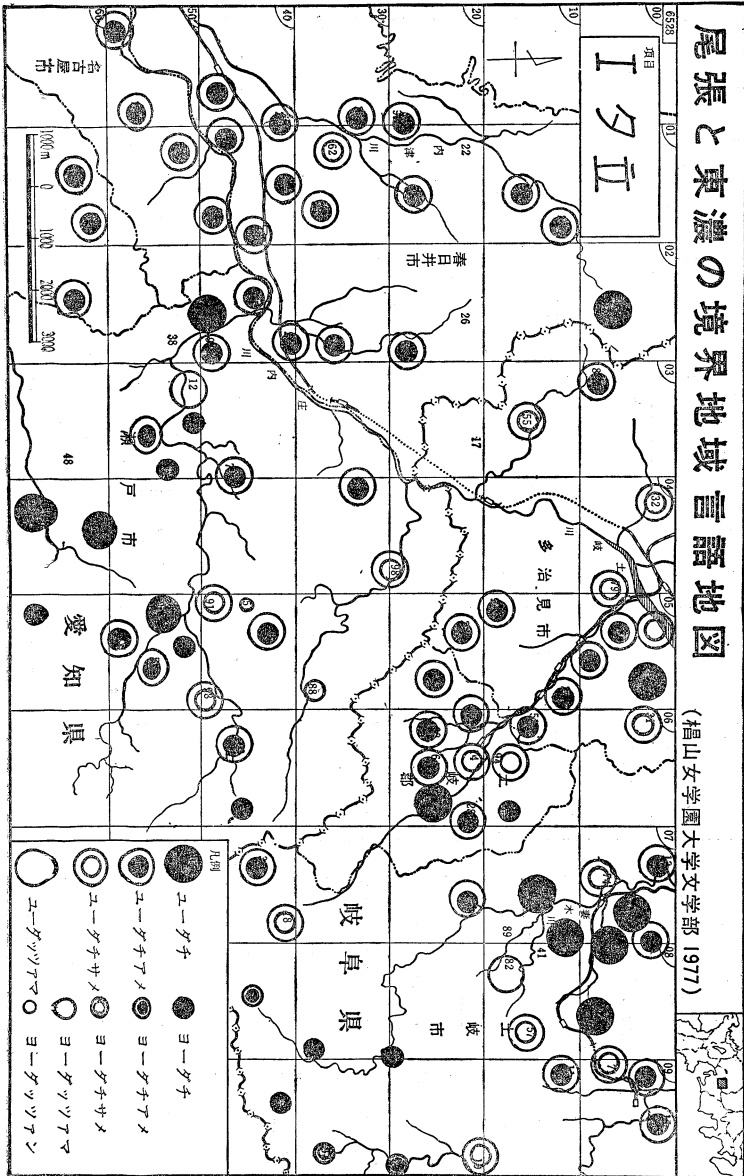
含む)はほぼ全地域に使用語として見られる。加えて、ユーダチに「さめ」を付けた語形ユーダチサメ(ユーダチサメ含む)が春日井市の1地点(3162)に見られる以外、瀬戸市東部から岐阜県多治見・土岐両市及び土岐郡に多く散在している。(地図Ⅱ)

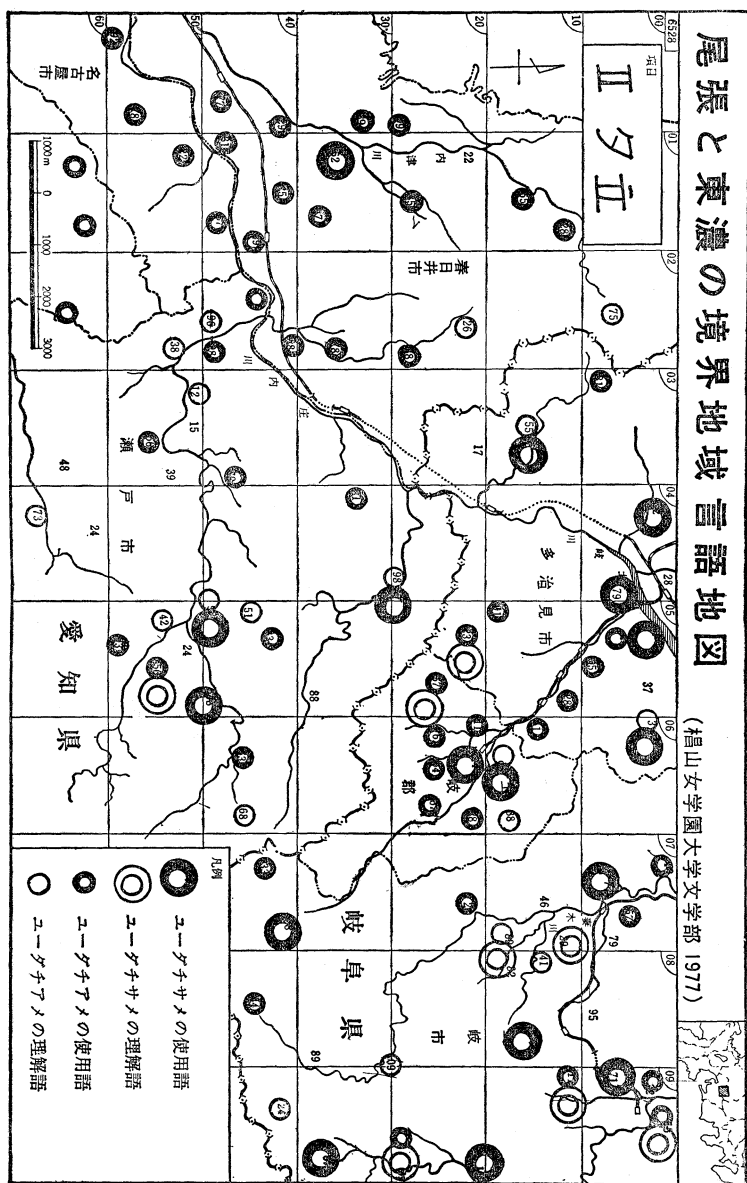
このユーダチサメのサメは『大言海』(大槻文彦著)に「さあめノ約、さハ発語ナリ、雨ト云フニ同ジ、熟語ニノミ用キラル。」とあるのに合致する。例えば「ムラサメ」「ハルサメ」などと同じ使われ方でないかと考えられる。

ユーダチサメは『日本言語地図』(国立国語研究所編)の255図「夕立雨(ゆふだち)」を見ると、左下の図のように西濃から東濃かけて分布している。尚、日本全土においてもユーダチサメという語形が見られるのはこの地域のみである。だが、もともこの地域一帯ではユーダチアメを使用していたところ、東濃地方でユーダチサメとなまったものなのか、逆に本来東濃地方に分布していたユーダチサメが、後に勢力範囲を拡げてきたユーダチアメに押された

状態にあるのか、今回の調査結果だけでは断定的な結論を出すことはできない。しかし、どちらかというと後者の伝播形成が有力かと思われる。なぜならば、現在瀬戸市は行政面では愛知県下に置かれているが、古く江戸時代において、「瀬戸の陶工は新しい土と薪を求めて、東濃各地へ移住した。」^(注1)ということから、主産業である焼物







を通して古くから、岐阜県下の多治見・土岐市等と関係が深い。このことは他の項目を見ても、瀬戸市が他の愛知県下地域春日井・名古屋方面に分布している語形よりも多治見・土岐方面に分布している語形を使用している分布図が多く、音韻面でも多治見・土岐方面と同じ音韻変化を見せているなどからわかる。従って、もとはこの地域にまでユーダチサメが拡がっており、後の名古屋方面からの拡がりと共に、隣接する瀬戸市から次第にユーダチサメが消えていったと考えた方が、東濃地方に分布しているユーダチサメが瀬戸市の一部まで伝播したと考えるよりも妥当ではないか。

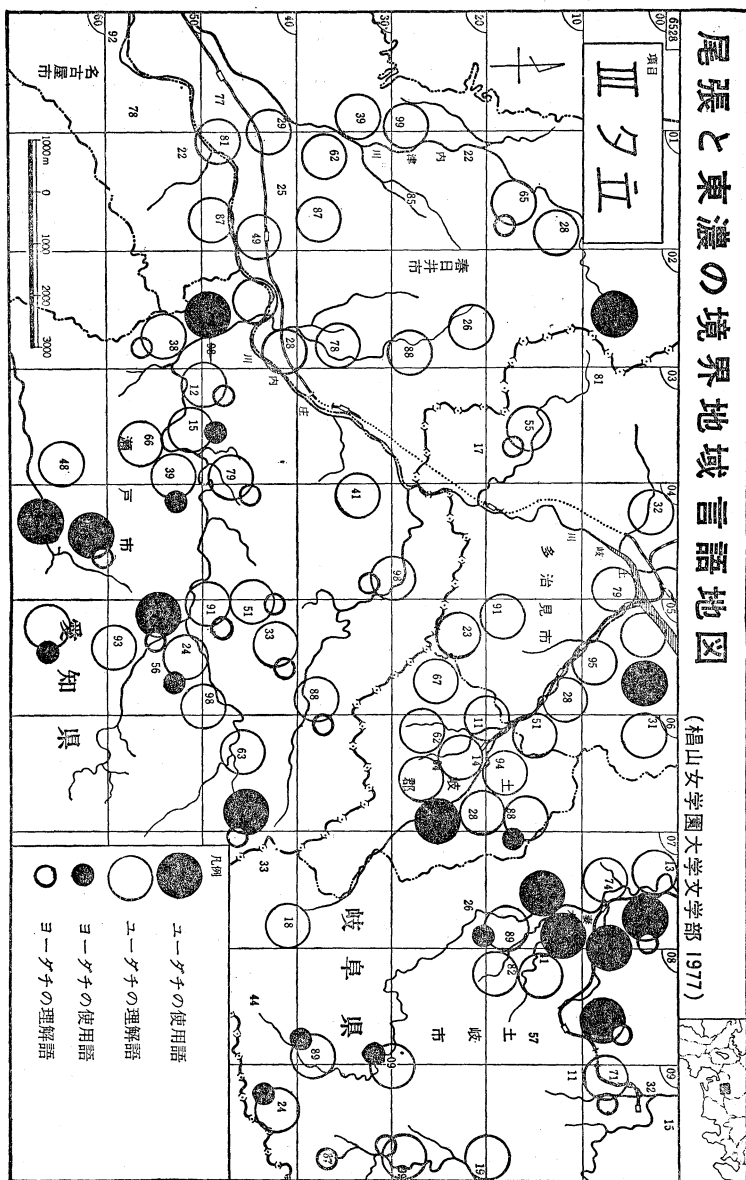
それに比べ、共通語形ユーダチ——この地域における共通語ユーダチに対する認識はもともとユーダチであったものにアメもしくはサメを付けることによって夏に突然降る雨を指したのか、ユーダチアメもしくはユーダチサメと呼んでいたものをユーダチと略して雨を指すようになったのかは定かではないが、少なくとも今回の被調査者であるお年寄りに関してはユーダチを共通語、最

も新しい語ととらえているようだ。そのため、ユーダチはこの調査地域ほとんどにおいて、まだ最も新しい語としての理解語にとどまっており、使用語としては瀬戸市の市街地(6427・6473)水野川流域(4296・5542)、土岐市の妻木川流域(0757・0779・0895・1729・1746)等に分散的に見られるだけである。(地図Ⅲ)

さらにユーダチに敬称の「様」「さん」を付け、そのつまった語形ユーダツァマ・ヨードツァマ・ヨードツァンはそれぞれ1, 2地点(1882・5312・3588・4551)で、理解語を調べてもほとんど見られない。

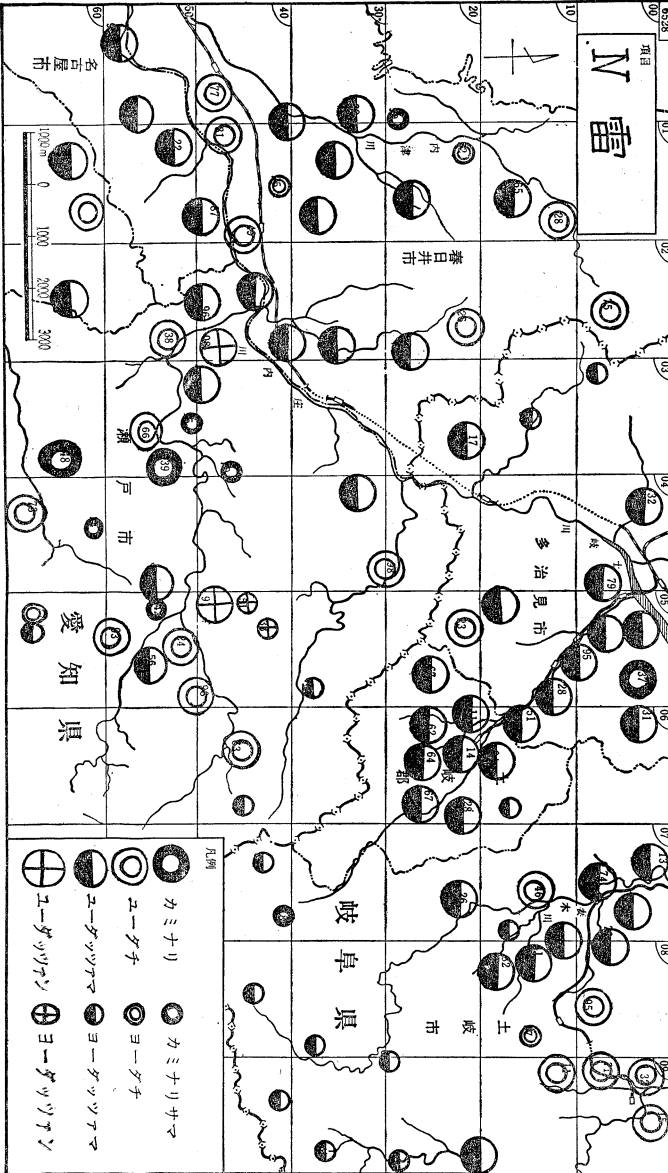
次に項目「雷」の分布を調べて見るに、質問「夕立が降る時などに黒い雲の中で、ぴかりと光って音がすることがあります。それを何が鳴っているといえますか。」から得られた語形にはカミナリ・カミナリサマ・ユーダチ・ユーダツァマ・ヨードツァマ・ユーダツァン・ヨードツァンがある。(地図Ⅳ)

これもまた、共通語、最も新しい語としてのカミナリは瀬戸市に2地点(5339・6348)、多治見市に1地点(0537)見られる他、カミナリに



尾張と東濃の境界地域言語地図

(梶山女学 国文学部 1977)



敬称の付いたカミナリサマが春日井・土岐両市にそれぞれ1地点ずつ(2099・4718), 瀬戸市に4地点(4379・5315・5542・6424)見られるのみである。

それよりも、「雷」をユーダチ(ヨーダチ含む)と呼ぶ地点は多い。とはいうものの地域性はなく愛知県下ではまさに散在しており、岐阜県下ではわずかに駄知地方に集中して見られる。

そして、この地域のほとんどに見られるのがユーダチに敬称「様」を付け、そのつまった語形ユーダツァマ(ヨーダツァマ含む)である。

「夕立」の場合、ほとんどといってよいほど見られないユーダチ(ヨーダチ含む)に敬称「様」や「さん」を付けた語形が「雷」では地域全体に分布しているのはおもしろい現象である。

このように「雷」に敬称を付けた語形が多いのは、人々が雷鳴に不思議な神がかった恐怖を感じ、敬称を付けて呼ぶことによって怒りをかわないように、自分の所に雷が落ちないようにと願ったのだろう。このことは、昔の人々が夕立神の存在を意識していたらしいことからわかる(9)

る。(注2)

以上のことから、この地域における被調査者の「夕立」と「雷」の使用語認識を双方比較しながらまとめてみる。

「夕立」と区別なく「雷」をもユーダチ(ヨーダチ含む)という地点は6地点。それに対して、「夕立」を雷鳴とともに降る雨ということからユーダチアメ(ヨーダチアメ含む)もしくはユーダチサメ(ヨーダチサメ含む)と呼び、「雷」のことを単にユーダチ(ヨーダチ含む)と呼ぶ地点は15地点。又、「夕立」をユーダチアメもしくはユーダチサメと呼び、「雷」をユーダツァマ(ヨーダツァマ含む)もしくはユーダツァン(ヨーダツァン含む)と呼び分けている地点は48地点。「夕立」をユーダチ(ヨーダチ含む)と呼び、「雷」をユーダツァマもしくはユーダツァンと呼び分けている地点は12地点。(地図V)

地図Vでわかるように、「夕立」「雷」の2項目はほとんど同じ方言語形を有しているにもかかわらず、両方の意を1語に含めていい表わしている地点は少ない。共にユーダチ

という6地点に、共にユーダツツァ
マという地点(5312)、共にヨーダ
ツァマという地点(3588)、共にヨー
ダツツァンという地点(4551)各1
地点を加え9地点しか見られず、統
一は見られないものの、種々の語形
で2項目が区別されていることがわ
かる。

今回の調査地域では、「夕立」を
「雨」を付けたユーダチアメもしく
はユーダチサメと呼び、「雷」を敬
称を付けたユーダツツァマと呼んで
区別している地点が最も多い。だ
が、それも分布にまともではなく、
様々な語形が各地点で隣接する集落

に関係なく使用されている。

これは今でこそ、夏のにわか雨が
「夕立」であり、大気中における電
気の放電から起こる音響が「雷」で
あることははっきりしているが、古
くは、「すべて夕立神の成すところの
もの」と、漠然ととらえていたこと
によるかと思う。そして、今回の被
調査者を含めた人々の認識の中には
今なお、「夕立」「雷」の区別があい
まいであることもわかった。

(注1)『瀬戸=土と火の町』 九原常雄編
第二章「瀬戸の春秋 瀬戸山離散と美濃」

(注2) ゆふだちのかみ = 夕立の雨などを
司るという神 『大日本国語辞典』

「めだか」の方言分布

曾 我 公 恵

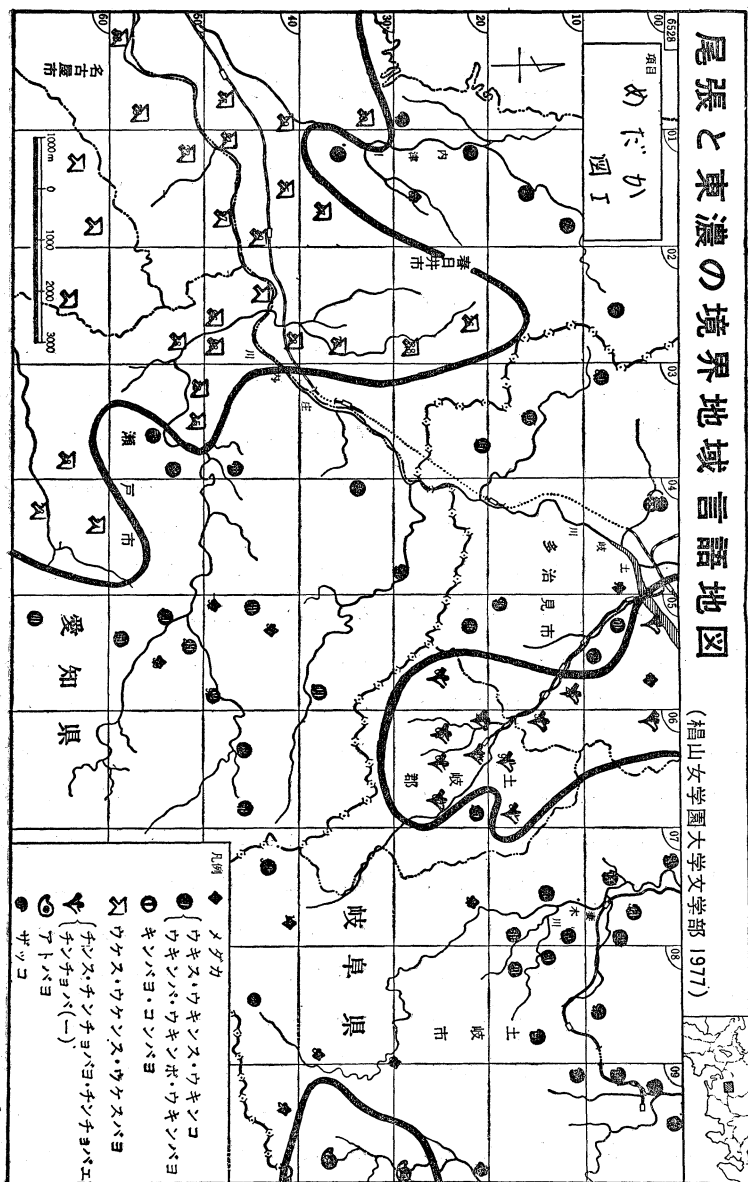
(絵を見せて)「小川の中で群れをなして泳いでいる小さな魚を何といますか。」の質問に対し、メダカ・ウキス・ウキンス・ウキンコ・ウキンバ・ウキンボ・ウキンバヨ・キンバヨ・コンバヨ・キンコバエ・キンキンバヨ・オキンチョバヨ・ウケス・ウケンス・ウケスパヨ・チンス・チンチョバヨ・チンチョバエ・チンチョバ(一)・アトバヨ・ザッコの回答を得た。

なお、図Ⅰは今回の調査における使用語の分布図であり、図Ⅱはウキス類、図Ⅲはウケス類のそれぞれ理解語と使用語の併用分布図である。この併用分布図においては、使用語は小さな符号にし実線で、又理解語は大きな符号にし破線でその範囲を示してある。

さて、図Ⅰを見ると全体にウキス類が広がっている中に、名古屋方面

からウケス類が、多治見市東部から土岐郡にかけてチンチヨ類が、また土岐市の2地点(2999・3987)にはアトバヨが進出しているように見える。そこで、図Ⅱ・Ⅲを見ながら分布の動向と歴史を考えてみたい。

図Ⅲを見ると、ウケス類は瀬戸・多治見・土岐市及び土岐郡へと広域にわたって分布を伝播しているが、図Ⅰにおけるチンチヨ類をさけるように分布している。これは、チンチヨ類の勢力が強く定着しているからであろう。しかし、そのチンチヨ類も理解語としては一地点も進出が見られないのである。図Ⅱにおいて、チンチヨ類を使用語とする地域にウキス類の理解分布がはっきり現われていることから考え合わせると、チンチヨ類は相当新しい分布と思われる。とすれば、理解語として一地点も見られないとしても、一概に今後



の伝播動向が薄いとは言えないだろう。

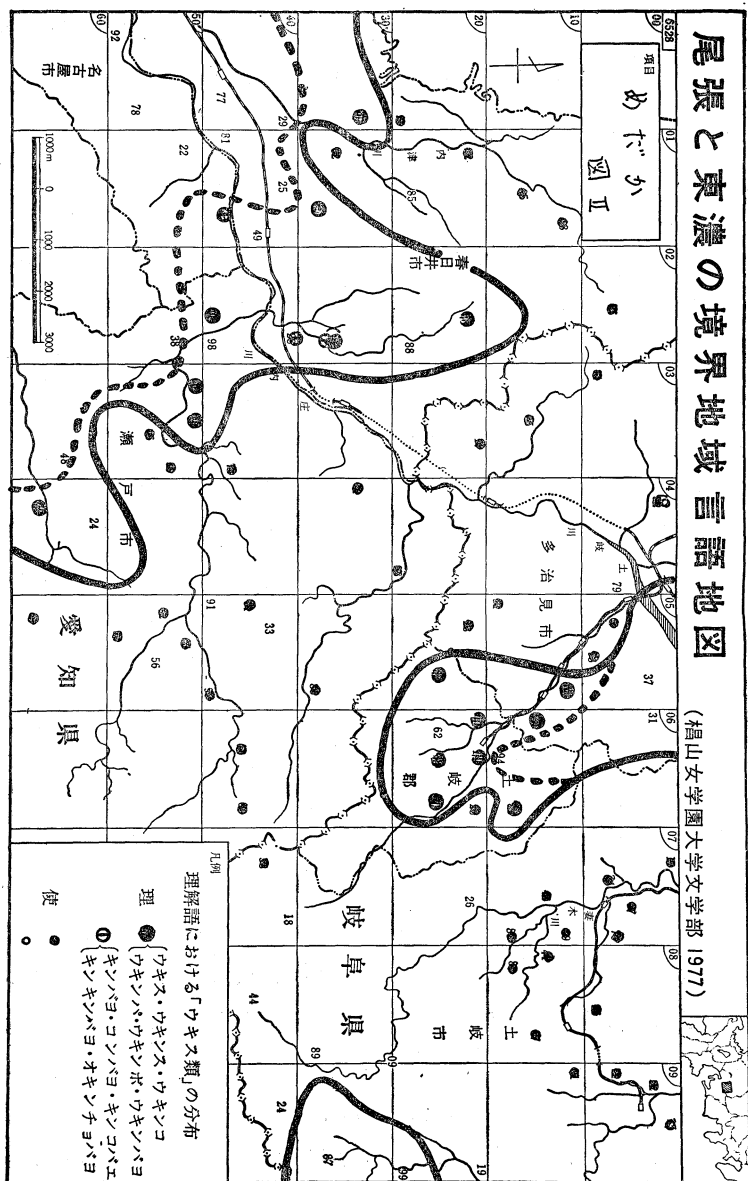
ところで、先ほどからウキス類は最も古い語形との意のもとに考えを進めてきたが、地図Ⅱの分布から見ても異論はないと思われる。また、キンバヨ類をウキス類と同系統の語形と考えて似た符号で示したが、それはウキスの「ウ」の脱落したものと考えたからである。その理由としては、キンバヨ類を用いる地点ではウキス類を併用して用いていたたり、併用していない場合でもウキス類の分布内に見られること、また分布もまばらで独自の分布域を形成していないことがあげられる。

次に、アトバヨについてであるが、これは上の田の水が下の田に流れる暖かい水と冷たい水との合流地点を「あと」と言い、アトにメダカが集まってくるので、アトに集まるハヨ(注1)からこの名があるらしい。このアトバヨに関する使用語としては、2999・3987の二地点のみであり、理解語においても0971の一地点(地図上には示してない)しか見あたらないこと、また使用語として分布する二地点における理解語がメ

ダカであることから、中馬街道(注2)沿いにおいては相当古くからメダカが分布していたものと考えられる。したがって、アトバヨは進出語形と考えられるが、方言としてのメダカが共通語としてのメダカと重なり定着すれば、今後の伝播動向の可能性は薄いと思われる。

次に、七・八十歳台と四・五十歳台の被調査者のウキスに関する意識の違いについて考えてみたい。

まず四・五十歳台の被調査者の意見を要約すると、「ウキスはメダカとは違うもので、水田におり鰯のような形をした小さい魚を言い、大きさはちょうどメダカと同じ位」とか「ウキスは、はよの子供を言い成長すると大きくなる」とか「老人は、メダカもウキスも両方ともウキスと言ったが、僕たちは区別している」ということになる。次に、七・八十歳台の被調査者の意見であるが、「ウキスは、浮いているように見えるからそう呼ぶ」につきる。この両者の意見から考えてみると、七・八十歳台の被調査者に四・五十歳台の被調査者のさすウキスという魚の絵を見せて、これもウキスと言うと



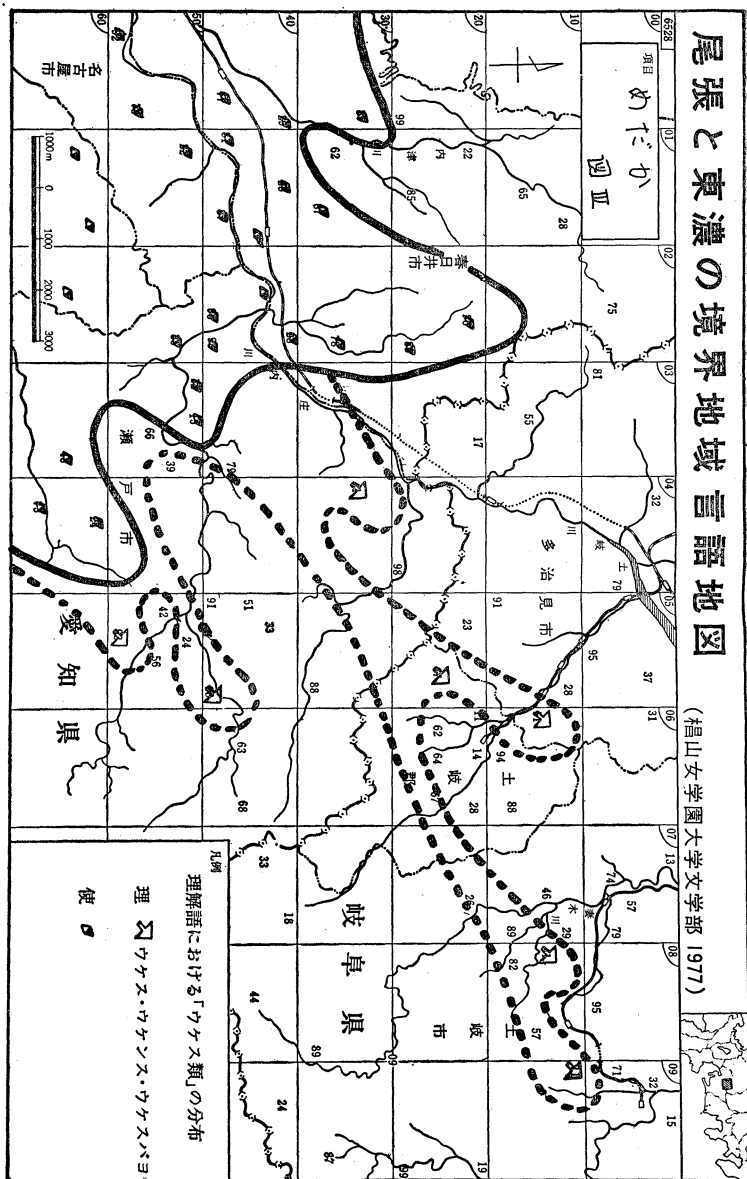
いった回答を得たわけではないが、メダカ位の大きさに水田や川にいるとしたら、メダカ同様に浮いているように見えても不思議ではない。となると、四・五十歳台の被調査者の話にあったように、七・八十歳台の被調査者が水田でも小川でも小さく浮いているように見える魚は区別なく、総称してウキスの名を与えていたものと考えられる。しかし、四・五十歳台の被調査者が言う「メダカとウキスという魚とが区別できなくて共にウキスと呼んだ」のではなく、メダカという新しい語形が入ってきて、「水田にいるのがウキスで小川にいる目の大きいのがメダカ」とか、「成長すると大きくなるはよの子がウキスで、成長しても大きくなるのがメダカ」といったように意味分化が生じたのだろう、古くは大きなとらえ方での名称しか存在しなかったのではないだろうか。

では、もう少し別の観点からこの問題について考えてみよう。

そこでまず、ハヨのついている語形を拾い集めてみると、ウキンバヨ・ウケスパヨ・チンチョバヨ・チンチョバエ・チンチョバ(一)・ア

トバヨをあげることができる。ウキンバヨ、ウケスパヨについては、浮いているように見える魚ということからついた名であろう。チンチョバヨは、小さいことを「ちんけ(ちびすけの略称か)」とか「ちんちくりん」とか「ちんびくいさ(岩村町史)」ということばがあるが、その系統の語であろうか、小さい魚を意味するものと思われる。また、ハヨは『多治見のことば』(1975年発行)によれば、ハエのことをハヨと言ったと載っていることから、ハエから変化したことばと言える。そこで、チンチョについている「バ(一)」は、バエ→バヨ→バ(一)と変化したものと考えられる。アトバヨは、あとに集まる魚というこら小魚をさすものである。また、ザッコという語形が4844に一地点見られるが、『尾張国愛知郡誌』(1923年発行)によれば、小魚を「ざこ」とあることから、小さい魚をさす語形と考えられる。これらのことから、古くは水面に浮いているように見える小さい魚を総称してとらえていたものと思われるのである。

最後に、「ン」挿入添加について



少々ふれておきたい。ここでは、ウ
キン ス・ウキンコ・ウキンバ・ウキ
ンボ・ウキンバヨ・キンバヨ・コン
バヨ・ウケンスとその例も多い。日
頃よく使われるものに、アンマリ・
キンノー・トンガラシ・ハッケン
ミ・マンド・ミンナなどがあるが、
「ン」が入ることによってリズムカ
ルな響きと共に郷愁をそそる味わい
を感じるのである。ここに方言の良
さがあるのではないだろうか。

なお、この項目については『日本
言語地図』全六巻の中に含まれてい
ないため、比較して考察をすすめる
ことができなかったことを追記して
おく。

(注1) 川魚——「はよ、かはいお」、魚一
「はよ」『東春日井郡誌』1923年東春
日井郡役所編愛知県郷土資料刊行会
発行(1968年12月20日)

はえ——「はよ」『多治見のこ
とば』多治見ことば編集委員会編多治
見市教育研究所発行(1975年6月)

(注2) 長野県下伊那郡根羽村から、恵那
郡瑞波市土岐市を経て愛知県瀬戸市
に至る街道。江戸時代 信州(長野
県)では、馬による物資の運送が盛
んであった。その制度を中馬といっ
た。街道としては裏街道であり、商
品流通の道であった。『岐阜県百科
事典』下、岐阜県百科事典制作委員
会編岐阜日日新聞社発行1968年3月
25日)

中馬街道は里程6里30町で上村よ
り漆原、静波、明知、陶を経て土岐
郡に入る路線である。『岩村町史』
岩村町史刊行委員会編岐阜岩村町
役場発行(1961年2月1日)